

**インキュバスになったので、今すぐ
女の子とエッチしないとダメみたい。**

空蝉

挿絵 / かな奈

立ち読み版



ATOMIC POCKET NOVELS
HE IS THE RECORD!

もんじゅ

CONTENTS

◆第一話◆
今日から俺も……インキュバス!?



7

◆第二話◆
少女の心はパンストよりも黒い

52



◆第三話◆
競合者

114



◆第四話◆
基礎から始めるしもペレッシン

176



◆第五話◆
ウオンテッド

225



◆エピローグ◆
また始まる日常

302



インキュバスになったのよ、
しなごん
みたい。

YUKI TO

SHINDO

HIME

YUKI

FUJI

FUJI

KAMIJO

CHARACTERS

ATOMIC ROCKET MOVIES
HE IS THE DISC JOKER
とんぱく

悠木智也

YUUKI TOMOYA

平凡な学生だったはずが、ある朝突然特異な力に目覚めてしまった少年。

姫野愛

HIKINO AI

古式ゆかしい家柄で、一見清らかな雰囲気を持っているクラス委員長。

新藤理枝

SHINDOU RIE

智也の幼馴染みだが、最近では冷たい態度ばかり取っている。水泳部のホープ。

藤井真琴

FUJII MAKINO

水泳部のキャプテンで、理枝や多くの女子から憧れられている美形の女生徒。

上条千里

KAMIKOCHI CHRISTO

智也のクラスの担任教師。生徒と親しげに接する温和な美女。

藤井美琴

FUJII MIKINO

学園の生徒会長で、真琴の双子の姉。おっとりとした容姿や言動をしている。

悠木瑠璃

YUUKI RURI

十年前、親の再婚によってできた智也の義妹。病弱でよく学校を休んでいる。

ズボン越しなこともあり、ストッキングのざらついた感触こそ感じ取れなかったが、その絶妙な圧のかけ方に、瞬時にして腰砕けにされ、背筋は歡喜の痺れに揺らされる。

「ちよ、ちよつと姫野さん!？」

戸惑う理枝を制して、声高こわだかに愛の宣告。

「今。この場で実践してしまうのが、一番現実的で、确实だと思うわ」

実践。つまり、この場で発情して、自分たちの心を読んでみせろ、ということか。

確かにリアルタイムでの実践なら、当てずっぽうや推測の入る余地もほぼない。

(にしても、なんでっ)

なぜ、ふたりは先に発情してしまっているのだ？

あわて慄きながらも導き出した推論は——この部屋が原因ではないかというもの。インキュバスのおいが染みついた部屋にフェロモンもまた染みついていたのでとすれば、説明が見つく。

「もう。じれったい」

ぐりりっ！

「……っ!」

少しだけ力の込めたつま先で股間をねじられ、肉の鼓動が轟き連ねる。

「こうすると、どうかしら？」

ダメ押しをするがごとく、いったん足を離して反転。こちらに向けた尻を、自らスカートをめくって露わとし。

「こ、こら！ 近い近いからっ！」

鼻がくつつきそうな至近距離で揺れるストッキング越しの尻たぶから、甘く、蒸れて熟成された香りが漂ってくる。

まるで半時間前の出来事を再現したかのような状況に息を呑み、巨大ヒップに魅入られている間に、右隣に立つ愛は再度足をズボンの上に乗せ、今度はややわやわと小さな圧だけをかけた始めた。

（やだ……お尻に視線、感じちやう……。くふ、ううん……。やつぱりお尻が好き、なんだわ。この人……。私と、一緒……。あ、ああんっ）

響き始める愛の、心の声。

同時に、もうさすがに慣れた激しい動悸に襲われて、さらにその直後。クラスメイトのストッキングに包まれた足の下で、ムクムクと聞かん棒が目覚まし膨張し始める。

「やめろって姫野……っ」

「大声を出すと、隣の部屋の妹さんが不審に思うんじゃないかしら？」

——小賢しい。

「ずりいぞ、それっ……!!」

妹を駆け引きの材料に使われたことでさすがに一瞬ムカツときたものの、

——くにくに。

「うあ……！」

柔い刺激を股間に浴びては、甘美に耐えることを優先せざるを得なくなる。声を、薄壁の向こうにいる瑠璃に聞かせることだけは、義妹を巻き込むことだけは絶対に避けなければならぬ。最優先事項だったから。

「教室であんなことまでした仲なんだから、苗字じゃなく名前で。愛……って呼んでくれると嬉しいな」

しれっと告げる愛の真意がわからない。

そう感じた直後に、答えは心の声という形で届けられた。

（まずは、悠木君。ううん、智也君の言っていることが事実か確かめて。もし、事実で。私の心を覗かれちゃってとしたら……）

「……し、したら？」

つい心の声に応じるように発した言葉を受けて。

（一蓮托生。私の虜にしちゃえば、外面だけいい女だなんて言いふらされずに済む）

「言いふらしたりしねえって！」

（それに、肌をすりあわせて……キスも、しちゃったし。あんなに感じちゃったの……は、

初めて……だったんだもの。これは、もう……運命よ)

尻だけで絶頂したことを運命というのは、さすがにどうかと思うが――。

「責任は、取ってもらわないと。ね、智也君？」

今しがた心の声と会話したことで、愛は読心能力については理解してくれたのかもしれない。心の声と現実の声を交互に使い分け、長い黒髪をなびかせた少女は会話を続けた。

「せ、責任って……?」

謝って済むレベルでないのは、重々承知している。が、飛び出た言葉は想像以上に衝撃的なものだった。

(不束者ふつものですが、よろしくお願いしますね。だ・ん・な・さ・ま♪)

「結婚っ……!!」

樂しげに弾む愛の心の声を受けて、真っ先に脳裏に浮かんだ二文字が、気づけば口を突いて飛び出ていた。

「ちよ、ちよつと智也!!」

床にへたり込んで指を噛み、懸命に快感を堪えていた理枝が驚き目を見開いてこちらを睨んでいたけれど――声に出した当人が一番驚きに包まれている。

「姫野っ、さすがにそれは話が飛びすぎっ……ぬふおアッ!!」

「愛……って呼んでくださいな♪」

瞬間的に股間への圧力が増し、息詰まるような感覚に襲われる。顔はにこやかなままだが、足の動きはどんどん活発に、えげつないものへと変化してきていた。

貪欲なインキュバスの性質もあつて少々乱暴に扱われた程度では痛みを覚えることもなく、むしろ悦び勇んだ肉欲の竿は、見る間に増長。胸の鼓動のリズムに合わせて膨張の一端をたどる。

圧を加えて悦に入る愛の視線は、下目遣いで煽るように理枝へと向けられていた。

そのあからさまな挑発を受けて、さすがに理枝のほうもカチンと来たらしい。

「……もうっ！」

隣室を気にして遠慮がち、それでも若干早足で理枝が近づいてくる。

「理枝っ……姫野を止めっ、おうふっ!?!」

「愛、でしょう？」

(ああ……足の下でビクンビクンしてる……お尻を見る目もすぐくやらしいっ……性癖も、利害も一致するんだもの。これ以上のお相手なんて……ないわよ……!)

情欲と打算の兼ね備わった結論を得た愛は、もう一步も引かない覚悟をも決めた模様。

一方、そんな愛を止めてくれるものと期待した理枝はといえは。

「ふんっ！」

なにを思ったか左隣に到着するなり座り込み、その左手を——愛の足が弄ぶふくらみへ

と伸ばした。

ふにゆ、にぎ、ぎゅむむうっ……。

「くうおあっ……！ お、お前らなアツ」

踏みつける愛の足と、ふくらみを強引に奪い取ろうとする理枝の手の攻防に晒され、股間にこれまで以上に痛切な快楽電流が雪崩れ込む。

（こ、これくらいあたしにだつてできるんだからっ）

張りあう気満々の理枝の目は、微妙に血走っているようにも見えた。

「あっ、ちよつと危ないじゃないっ」

「だつたらその足をどけてよ！」

バランスを崩しかけた愛が文句を口にしても、これまた一步も引かぬ構えで幼馴染みの手はズボンのふくらみの上へ覆い被さってくる。

（けっけ結婚とかダメ絶対！ 智也はあたしの……）

「えっ……」

理枝の心の声について反応して視線を重ねてしまい。見つめあう形で双方同時に、ポツと火が点いたように赤面した。

さすがにこう何度もそれっぽい意思表示を（心の声という形で）されて、気づかないほど鈍感じゃない。

(理枝が俺のことを……だなんて、今まで全然思いもしなかった……)

意識するほどに、全身茹だるほどに火照っていることを自覚する。

彼女の手の内に収まったふくらみも、ズボンの中で痛いくらいに張り詰めていた。

——ずりりっ！

「うん？ ……のわああ！ いつの間につ」

理枝と見つめあい、危うくふたりの世界へと突入しかけた矢先。スースーする下半身に気づき目を向ければ、いつの間にやらベルトを外し終えた愛がズボンのボタンまでも外し、チャックを引き下げて、トランクスに手をかけようとしていた。

「……無視されるのは嫌いなよね」

「ちよつと、やめてよ！」

再び始まる、女同士の主導権争い。そこにズボンとふくらみの持ち主の意思は、ひとり粒たりとも介在していない。

(なんなのよこの子っ。智也なんか急に色気出すなんてっ)

(もう添い遂げるって決めたんだから。今まで傍にいたくせにアタックひとつしなかった意気地なしは引っ込んでなさいっ！)

表面上口に出していなくとも、インキュバスの頭の中にははつきりと響く。水面下で練り広げられる罵詈雑言の雨あられ。

(う、うるさつ……頭がガンガンするううううっ！)

心が読めるのも良し悪しだ。理枝も愛もよほど感情的になつて居るのか、その心の声は大音量で脳内に流れ込み、延々と繰り返されるのだからたまらない。

つんざかれた耳に残る衝撃と、腰の奥でたぎり続ける欲熱との波状攻撃に、意識は混濁。おかげで、トランクス争奪戦を繰り広げる女子ふたりを止めることも、注意することすら叶わなかった。

「だ、だめつ……それ以上引つ張つたら出ちゃうっ」

「それって新藤さんじゃなくて、智也君の台詞じゃないかしら？」

——ごもつとも。

(だつて……あたし、まだ男の人のアレ……見たことないし。ちよ、直接触れる自信、ないよっ……)

(こ、怖いけど。こうなつたらもう、じかに攻めるしかつ……！ でも智也君の……というか男の人のつて、実物はどんな色形なのかしら?)

平素と裏腹に臆病な反応を示す理枝に対し、同じ初体験でも、恐怖に興味が勝っているらしい愛。

どこまでも対照的なふたりのせめぎあいの中で、こねくられ、転がされ、扱かれまくつたトランクスの奥のふくらみが、ついに限界を訴え、放出の予兆となる脈動を強めていく。

「ぐく、うっ……も、もう出るっ、出ちまうからっ……」

離れないと、手や顔にかかつてしまうぞ。そう、乾いた舌と震える唇でどうにか言葉が続けようとした、矢先。

「んむっ……ちゅううう」

愛の唇がトランクス越しのふくらみへと、密着。ついばむように二度三度キスしたかと思えば、そのままチューチューと浅ましい音を立ててトランクスごと吸引し始めた。

「うっ、お、おうっ、ぐつくうう……っ！」

ドクドクと、胸と腰の奥でうるさいくらいに鼓動が轟く。ひとりでに持ち上がった尻は、間近に迫った放出の瞬間、それに伴う快楽衝動に備えて力み、すぼまった。

足のつま先は覚悟を決めたように丸まって、へその下にも力を込める。

「え、え、えええっ……」

目を見開き固まった理枝は、さすがに対抗できず。手の上下運動こそ続けているが、もはや戦線離脱の様相だ。

つまりは、愛の独壇場。

——するるっ。

(やあんっ。じかに握っちゃった……男の子のって、鉄みたいに硬くて熱いんだア……) 握られた肉竿は、愛の手がもぐり込むことで生じたトランクスの隙間からこぼれてい

く熱気の代わりに、ふんわり被さってきた手の温みに包まれ、ご満悦。

「も、もう、出っ……………る……………！」

抗いきれぬ肉の衝動に、腰が大きく持ち上がり。

(だめえええっ！ あたし以外の子で出さないでっ！)

(かけていいからっ。私にっ……………出してっ、見せてえっ！)

理枝と愛。ふたりのけたたましい心の声が交錯する。

「……………っ！」

どちらの意に沿うべきか。

悩む暇も余裕もない中で、導き出した答えは——。

「ぐ……………うっ！ ……だあああっ！」

——どんっ！

左右に陣取るふたりを押しのけて、無理やりに立ち上がる。

「あ……………」

「きやあっ！」

びゅるっ、びゅぶるるるっ！

あわてて顔を寄せたふたりの顔面めがけ、白く濁った飛沫が架け橋のごとく降り注ぐ。粘ついた飛沫は幾筋も止め処なく。弧を描き大量に、シャワーのごとき勢いで噴き出し続

ける。

「やつ……ば、ばかあつ。グリグリつ……すんなあつ……な、なんか、くさいつ……」
 (や、あ……こ、これ、おしつ……こ? でも白くて粘つくくて、な、なに!?)

かけられている液体の正体すら知らぬ幼馴染みの頬に竿の先端を押し当て。扱き立てながらまた大量の白濁を噴き連ね。

「あぶつ……つぶ、つあ、あふわあああつ……髪にへばり、ついちゃううつ……!」

(ひあつ、あつああ……べとべとお……。で、でもんだかばおつとする……鼻にツンと来て、全然嫌じゃ……な、い……。あア……ンンン……ッ!)

いつもの澄まし顔とは大違いの蕩け顔。その額めがけて照準を合わせ、小便みたいに勢いよくホカホカミルクをぶちまけた。

「う、おつ……!!」

いっそう蕩け顔になった愛が自おのずから頬を差し出し、ズリズリと肉竿の先端を扱きだす。その淫蕩ぶりに胸と腰の芯が昂って、絞り出すように白濁の液が噴き上がる。

びゅるりゅつ! ぶつびゅぐううつ!

愛の自慢の黒髪にたつぷりとこびりついた白濁汁が、ドロリと糸引いて垂れ落ち、生臭い臭気を打ち放つ。

びゅりゅぶびゅうつ!



(あ、あと、数ミリ……)

おたがいの鼻息、吐息を肌で感じることできる至近距離。目を閉じて待つ理枝の顔に近づく側の顔も、負けじと熱で火照り、閉じたまぶたは緊張と昂奮で小刻みに痙攣してしまっている。

——理枝!

意を決して、突き出した唇を幼馴染みの口元へと——。

(させるもんですか!)

「きゃあっ……!!」

「……へっ?」

脳裏に響くソプラノの叫びと、遠ざかっていく理枝の叫び声。ふたつに揺さぶられ、そろりと開いた瞳の真ん前に。

「んふ♪」

理枝を押しつけ、上下互い違いに跨がってきた愛の、巨大ヒップが鎮座していた。タオルケットに深くもぐり入った少女の頭は、短パン前面をぱっつんぱっつんに盛り上げるテントの先っぽにご対面の真っ最中。

「こんにちは、お亀さん♪」

「おっさん臭い例えてんじゃ……っ! おふうう……っ!?!」

ふーっ、ふううっ……。

(すごおい……敏感♥ 私のお尻見て、こんなに硬くしてるんだ……♪)

熱のこもるタオルケット内部にあつてなおネットリと熱い愛の吐息が、繰り返し執拗に短パンのふくらみに吹きかかる。

——するる……にぎっ。

「あ、熱うい……」

「熱いのはお前の息っ、だっ……ああ、あくう……!」

愛の手が短パンとトランクスをめぐり内側へともぐり込んできて、一気に流入した外気に肉の竿が驚きすくんだのも束の間。冷たい指に絡みつかれて、肉竿はこれまで以上に硬く、凶悪な角度で反り返ってしまった、

「いたたたたた。もうっ、急に突き飛ばさないで……っ、あーっ!」

ベッド下に転がり落ちた理枝の驚きと怒りに満ちた声が聞こえてきたが、今はとにかくそちらに気を回す余裕すらない有様だ。

「ひ、ひゃっ……姫野っ、なんでいつもいつもお前の手は冷たいんだよっ」

「心のあつたかな子は、手が冷たいって言うじゃない?」

——自虐のつもりか?

ツッコむ暇もなく、裏スジをさすられた肉の幹から歓喜の脈動が湧き上がる。

「いい子、いい子。ふふっ、先っぽから、お汁が出てきてる……」

（男の人も気持ちいいと濡れるのね。なんだか……楽しい。好きな子のが、私の手の中で、指の動きに合わせてヒクヒク、ピクンピクンして……♪）

ひんやりとした愛の手を、肉竿の熱が蕩かし、徐々に徐々に温めていく。

逆に冷やされた肉竿はより雄々しく威勢よく、彼女の手の内で膨張と鼓動を繰り返しながら、たぎる肉欲のマグマをたっぷりと蓄積し続けていた。

「く、っ、先っぽばっか……攻めてきやがってえっ」

数回情欲処理を手伝ってもらったただけなのに、もう弱点を見抜かれてしまっている。

（物覚え良すぎにも程つてもんがあるだろ!!）

指先でグリグリ先端を弄くられるたびに感激と肉の衝動に吞まれ、噛み締めた口端からは、押し殺した嬌声の代わりに唾液の糸がこぼれ落ちていく。

悦楽の波に溺れゆく男の視界は、フリフリと揺れる巨大ヒップにいまだ占領されていて——触れたい。もみたい。頬ずりして、思う存分味わいたい。尻に対する衝動が抑えられなくなってきた。

（好きにしているのよ？ 見て、触れて……嗅いで。このお尻は、あなただけのモノ）

絶妙のタイミングで届けられた、愛の心のささやき。心の声すら上手く使い分けて誘惑の一手として扱う、同い年の少女。

理解していながら、彼女の手管に弄ばれ、溺れていく。

「……っ!」

剥き出しの生尻。夢にまで見た、愛の生尻。覆うものないソコから、ぼたりぼたぼた。腰振りに合わせて甘い汁が、垂れ落ちてくる。

(女の子のアソコって、は、初めて見たけど、すげえ……!)

ぷっくりとした恥肉の割れ目も、チラチラと視界に映る、薄めの恥毛も。今は谷間に隠れて姿の見えないすぼまりに至るまで。目にはしているだけで、肉の竿が愛の手の内で鼓動する。

なのにその上、すべてを自由にしてしまっただけのお達しを愛自身が心の声として発してくれているのだ。男として、尻好きとして、いきり立たないわけがない。

(今夜は智也君が昂奮することが大事なんだから。だから……恥ずかしがらないで。して、して、してええええっ!)

心の声の抑揚に合わせて淫らに揺れる尻たぶを、両手を使ってむんずと捕らえ、固定する。そして――。

「きゃ……っ!」

無意識のうちに彼女の尻肉を左右に押し広げ、少女が、いや、人がもつとも恥ずべき部分――排泄用のすぼまりを完全露出させていた。

「やああん……お、奥の奥まで見ちゃうの……?」

(私のはしたない穴の奥の奥まで……そ、想像しただけでアソコがあ、熱くなっちゃうつ、よけいにお汁、こぼしちゃうううつ)

戸惑う愛の、けれどあるじの行動を許容するように甘く蕩けた声音が、ますます牡の衝動を後押しする。

「ちょ、ちよつと!」

蚊帳の外状態の理枝の、戸惑いと驚きに満ちた声が聞こえる。常識で考えれば、そういう反応がまっとうなのだろう——自分と愛の異常性癖を頭の片隅で自覚しつつ、それでももう、ヒクつく肉の穴を目にしてしまった以上、止まらない。

(止まるつもりになんて、なれるもんか——!)

頭を持ち上げてさらに顔を寄せ、鼻先をヒクつかせて尻の谷間のおいを嗅いだ。

「ふあ……! やあん、息が吹きかかって、く、くすぐったあいつ」

(お、お尻の穴またヒクンって……見られてるのに、動いちゃうつ、ふあ、ああ……ン! は、恥ずかしいのにつ、悦ばれてる思うと、と、止められないいつ)

少女の尻穴は、羞恥からか昂奮からなのか、始終ヒクヒクと蠢いては、彼女に悩ましい声を吐き出させ、男の情欲を止め処なく刺激し続けてもくれた。

「ん……ぢゅっ!」

我慢、できない。より顔を寄せた結果、鼻先から愛の尻の谷間に着地して、なおグイグイと顔をすりつけ。

「やあんっ。へ、変態チックよ智也くっ、んっふあああんっ」

（やっぱりお尻がイイっ……！ お尻でされるのが好きっ！ 恥ずかしいところの隅々までしてくれるあなたのことがっ……だ、大好きいっ！）

ドクン——。イヤらしい告白を受けて胸高鳴り、また一段と肉の竿が勃起する。

もっと、愛の求めに応じてあげたい。もっと、尻で乱れる彼女が見たい！

そして、とうとう衝動のままに——震えるすばまりにそっと、ついさつき理枝にしそびれた口づけを、した。

「ひあああううう!!」

さすがに予想外だったのか、愛の悲鳴にも似た嬌声が室内にこだまする。

（わ、私、今……お、おおお、お尻の穴にキス……され……て!? う、嘘っ……や、やだ私っ、におい嗅がれるより恥ずかしっ……でも、でもお……っ。うんちする穴に、智也君の息が、唇が、押しつけられるの……あ、ああ、またキyunつてくる、のおっ……!）

羞恥に溺れながら悦びに惑う愛のことが、愛しくてたまらない。

「んばあっ……」

口を離し、続いて這わせた指ですばまりを軽く、何度も何度も突っついた。

「ひあ！ あつ、あふうつ、やあ……はうつ！」

(そんなにホジホジされたら、私、わたしいつ……嬉しすぎて頭の芯までトロトロになっちゃうつ！)

ヒクつく肛門を見て「愛らしい」と思うのは、常識的に考えて異常なこと。

(でも、可愛いって思えちまったんだから、しょうがねえだろっ!!)

澄ました顔も、その裏に隠された素顔も。大きな胸も、恥ずかしがりながらヒクヒク息づくお尻の穴も——やっぱり、可愛い。姫野愛は可愛い女の子だ。

「うう……ほんつとに変態なんだから！」

すまん、理枝。こちらの心が彼女には伝わらないことを知りながら、胸の内できつそりと謝罪する。

罵られても仕方のない変態行為をしたのだ。理枝が呆れるのも無理はない。ともすれば「もうこれ以上つきあえない」と幼馴染みの口から行為からの離脱宣言が飛び出すことも、覚悟した——が。

(あたしだって……智也のためなら、もっと大胆になれるんだからっ！)

「り、理枝？ それってどういう……!？」

負けず嫌いぶりをいかんなく発揮した理枝の行動は、予想を見事に裏切るものとなった。

——ぺろん。

「あ、あんまり、じっと見ないでよっ」
見るなど言われても——無理だ。

理枝自身の手でめくり上げられたタンクトップからこぼれ出る、生乳。決して大きくはないけれど形よくツンと上向いた肉の丘が二個、ベッド下から迫り出してきて、頬へとぶにゆり。勢い任せに押し当てられたのだから。

（や、柔らかかっ……それに、想像よりずっとあつたかくて……な、なんだかコリコリしたポッチが当たって……!）

その感触と温みたるや、服の上から触れるとは段違いの衝撃度。

視線は頭上の愛の尻から、頬に押し当たる生乳の突端へ。視界端にちらつく薄桜色の乳頭へと、高速移動を余儀なくされる。

（やだ……み、見られちゃう。あたしのおっぱい、変じゃないよね？ 智也……気に入ってくれるかな……）

「……可愛くて、きれいだ」

「ふえ!!」

「好きだって言ったんだっ」

何度も言わせるなよ、恥ずかしいんだから——。

右頬に押し当たっている理枝の生乳、その右乳首めがけ、照れ隠しも兼ねて舌を伸ばし、

吸いついた。

ちゅううううううっ！

「ひやうっあつあああんっ！」

さつきしそびれたキスの代わりとばかりに、思いきって強めに吸い立てる。口の中で見る間に勃起し始めた突起部分を、丹念に舌尖で転がし、なめしやぶつていく。

「ばか、ばつかつ、ああああ♥」

（おっぱいにチュウ、する、なんてえ……っ、唇にだつてまだ、なのにイ……ド、ドキドキするっ、の……智也に伝わっちゃう、のにつ、や、あ、嬉しくて顔が緩むの、我慢、できなくなるう……！）

（理枝の恥ずかしげに堪えてる顔も、女の子らしい蕩けきつた喘ぎ声も、どつちもたまんなく可愛い……！）

愛しさに駆られて、思わず吸い立てる勢いが増してしまふ。

「ひやあううんっ、の、伸びちゃううう」

「ふ、ふまん」

すまん——謝って少し吸引を弱めたものの伸びた乳肌の外見と、同時に響いた理枝の嬌声とが脳裏にこびりついて離れない。もう一度、怒られるのを覚悟で。そう考えた矢先。

「やああんっ。こつちも忘れちゃだめえっ」

（理枝さんのおっぱいチュウチュウしながら、私の手の中で硬くするなんて……贅沢にもほどがあるんだからっ。……でも、ふふっ、こうやってシコシコするとすぐに……あなた
の視線を独り占め。ほら、ほらあ……っ！）

「うおっ！ わ、わかっているからっ、うくっ、そ、そんなに扱いたら出るっ出るから！」
ほんの一分ほど放置されたくらいで拗ねた愛の手が、肉竿をシコシコと扱き攻め立ててくる。竿の切っ先になじんだ汁をペロリと直接ねぶられて、またドクドクと昂る己おのが胸の鼓動を聞いた。

（口の中のおっぱいの、理枝の心臓の音……ドキドキも、伝わってきて……）
腹部近辺に押し当たる巨峰——愛の、胸の鼓動もだ。

むぎゅっ……

理枝の乳を吸うために横向く顔面。その横つ面に、真上から愛の生尻が落ちてくる。

「ふあっ……んんっ！ やだ、滑っちゃう……」

着地するなりヌリと滑った股根の湿り気は——彼女の昂奮度合いを示す、なによりの物証。

（わ、私のお尻にももう一度、頬ずりしてえっ。視線、独り占めしたいのおっ）

望まれたとおりに、理枝の乳を吸いながら動かせる範囲で頭を揺すり、頬の上の柔肉を愛撫した。

(おっぱいチュウチュウされるの、いつ、いいようっ……。ジンジンして、ドキドキ、して……。たまなく胸の奥が、あつ、あつたかく、なつてくう……。♥)

「ふひらだふえ、ふっへひやふ……!」

好きなものだけ、吸ってやる。理枝が望む限り、何度でも。強弱も、吸い立てる長さも、望みのままに――。

三人一緒に、高みへと上り詰めていく、そのために。

「れちゅうっ。あふ……。ピクピク、ひれきふえる……。っ」

肉竿の幹から根元、根元から傘の部分までをなめ上げながら、敏感に予兆を感じ取った愛が、くぐもつた声を嬉しげに弾ませた。

(もうじき出ちゃうのね。竿の先っぽから、びゅびゅうって、またあの白い汁がたくさん、私の顔や髪に……。いいよ、全部、全部私が受け止めてあげるから……。ちようだあいっ!)
頬の上を這いずる愛の腰の動きも激しさを増してくる。

(ふあ、あああつ、やつぱりお尻っ、いいっ! お尻の穴もつ、す、好きな子の顔の上で何度もヒクヒクしちゃうって、るっ、うっ、んふあつあつあああ〜っ!)

愛の尻穴の蠢きは、谷間にうずめた鼻先にも伝わっていた。その過敏な反応を感じ取るたびに、彼女の手の内に収まった聞かん棒も、ドクドクとけたたましい情欲の鼓動を張り上げる。



なにせ、初めてじかに目にする幼馴染みの女性器。ずっと小さいころから知っている女の子の、秘処なのだ。

(とうとう、理枝と……)

してしまふのだ。感慨と感激とが複雑に絡みあい、胸の奥が高鳴っている。

「う、うっ……じつくり見すぎだつてばあ……」

(もう我慢できないんだから早くうっ。は、恥ずかしすぎて死んじゃう前にイッ……！) 愛のソコよりもやや手狭に思える割れ目が目の前で物欲しげにヒクつきながら肉の唇を開閉させ、サーモンピンクの肉粘膜を覗かせていた。

大量の蜜を漏らしたその穴に、今まさに己の肉棒が先っぽだけとはいえ接着し、挿入されようとしているのだから。

びくんっ！

「ひやあはああっ!!」

逸った肉の切っ先が理枝の手を離れ、偶然彼女の割れ目の上端——クリトリスを弾いてしまう。

「ぐくうっ……!!」

それだけで快感が電流のように背筋を走り抜けていく。

理枝の気持ち優先して主導権を譲っているものの、本当なら自分から腰を押し上げ、

今すぐにもつなかりたい。そんな苛烈な情欲を必死に食い縛った唇の奥に押し込めて、幼馴染みの一挙手一投足に注視して、昂る鼓動に耽溺する。

(な、なんてところ擦るのよっ。あ、あたしばっか気持ちよくしてくれてえっ……)

「ふっ、う、うう、じつと、しててっ……!」

そう理枝が口にしてから、数十秒、ひよっとして数分は待ったかもしれない。やたらと長く感じた躊躇と焦らしの時間の、後。

——ずっ、にゅぶぶぶぶっ……。

やっど、浅く肉の先端が小さな割れ目へとはまり込む。

「んくっ! い、痛っ……」

(や、っぱ痛いっ……。濡れてても、こんな……に、きついっ!!)

「うあっ……!! り、理枝っ……」

彼女がひと息に腰を落とす瞬間から、肉の竿にぬめつとした蜜液が絡んできて、しとどに股間を濡らされる。同時にヌルリと生温かな感触に肉竿全体が包み込まれ、またひとりでに、より大きく腰が飛び跳ねてしまった。

痛みに顔をしかめる幼馴染みのことが心配だ。なのに、そのぴっちり閉じた肉壁を——押し入った肉の竿の切っ先が、割り裂いてゆく。

「ひあっ! あぐっ、うう……じ、じつとしててっ、よおっ……」

(い、痛い痛い痛いっ……で、でもっ……嬉しい、よおっ……)

二重の意味で今にも泣きだしそうな幼馴染みの前髪を、ヘアピンごとなど、梳いてやる。瞳の周りをそつと指でなぞって、染み出した涙をすくい取り、自らの口に運んでしょっぱい味わいを嘔み締めた。

「あ、焦んなくていいから。理枝が落ち着くまで、俺も動かないでいるっ……」

本当は、腰の奥に溜まった肉の熱気がしきりに律動を促して、激しい葛藤に苛まれている。今すぐにでもヌルヌルの膣内を味わいたい。

「だけど、それでも。一緒に気持ちよくなるために。」

「ば、ばかぁ……っ」

(なんで……こんな時、いつも以上に優しい顔してくれるのよっ……ばか、ばかあつ)

堪えきれない大粒のしずくをこぼした理枝の目元をまた拭い、指先に乗った取れたて涙をしやぶり取る。

(うゝ、私だつてあんな風にされたいっ、ぎゅって抱かれて、お、お尻に好きな人をつ……あ、ああああんんっ！)

逆サイドにいるため遠目しか視認できないが、愛の脚が開閉しているのが辛うじて見て取れた。脳裏に届く心の声から察するに、彼女も相当フェロモンの影響を受け、乱れてしまっているみたいだ。

(姉さん、姉さん、姉さあんっ……!)

(そ、そうよっ、もっと吸って! 毎晩してるみたいにつ、ううん、いつも以上に強く抱いてっ、しつこく乳首っ、チュウチュウしてええっ!)

藤井姉妹の嬌声からは、ふたりの情愛の強さと、依存とも取れるほどの関係の深さが読み取れる。

こちらの目が届く距離にいる姉妹カップルは、今やおたがいの指という指を絡めあい、妹が姉を押し倒す形で睦みあっていた。

——ずっちゅ……。

「うお……っ!」

「んんっ……よそ見しちゃ、やだっ」

浅く竿の先っぽのみが挟まった状態で、理枝の腰が小さく左右に揺らぐ。絡まる蜜がいやらしい音色を奏でて、いつそう濃いフェロモンが全身から噴き上がるのを体感した。

(あ……なんか痛みが引いて……ふ、ふああああっ! やっ、きゅ、急につ、気持ちっ、い……っ、あああああっ……!)

にゅぶっぢゅぶぶぶううっ!

少女の割れ目に、肉の竿が吞まれゆく。根元まで竿を飲みきった幼馴染みの尻がすぼまりながらどっかと腰の上に降り立った瞬間。

「うくあつ、ああつ……!!」

——どくんつ!

我慢しきれなかつた快樂の塊が、白濁色のマグマとなつて竿の内部を駆け上る。

「ひあつ、あつあくううつ……ま、まだ出しちゃだめええつ!」

引き攣れる肉壁で吐精の予兆を感じ取つた理枝の指が、肉竿の根元をつかみ、痛いくらいに締め上げた。

(だ、出したいのにつ、出せないつ、なんつ、てええつ、つぐう……つ!)

強制的に射精をせき止められた聞かん棒の内部で、行き場のなくなつた情欲が暴れ回り、頭と腰に執拗な警鐘を——腰が蕩けるほどの愉悦衝動と共に打ち鳴らす。

押し止めた側の理枝もまた、腔内で脈打ち続ける肉竿がもたらす熱と振動に身も心も揺さぶられて、涙顔をよりくしゃくしゃにして喜悦に溺れ悶えていた。

「やつあ、んつ、んんつ……!」

それでもなお、彼女の腰は止まらない。

(いつ、しよ……にいつ。あ、あたしももうすぐにイけるからつ、ううん、もう少しずつイッてるつ……からあつ、だから、一緒に最後まで……気持ちよくなりたい……つ!)

「つ……! ああ、俺もつ……一緒につ……理枝と一緒に、イきたい……!」

想いの強さを見せつけるみたいに大音量で届いた心の声を受けて、感激に咽むせぶ手を彼女

の胸元へ。露出した右胸をふくらみの外周に沿ってもみほぐし、じわじわ桜色の突起目指し指先を這い上がらせる。

「っ、ふ、あ……っ！ ま、たあっ、胸ばっかあああっ」

（そこがいいのっ、おっぱい、ビリビリ感じてっ……智也の温もりが直接、あ、あたしのおっぱいにひつついてきてっ、しっ、幸せっ、なのおおっ！）

ぶぢゅっ！ ぢゅぼ！ ぼびゅぶぶっ！

いつしかたがいにリズムを合わせ、腰を振り立てる。

理枝の腰が浮き上がれば追いかけて肉の竿を突き刺し。肉竿が引けば間髪入れずに引き締まったヒップが降りてきて、深々根元まで呑み込んでいった。

（姉さんのが絡みついてぐちゅぐちゅっ！ やらしい音が響いてるよおっ）

（ふふっ、んふふふふっ……そう、ね。真琴のも、私のピラピラにちゅっちゅキスしてきてる。私……あなたじゃないとダメっ、なの……真琴じゃないと……！）

股間をくつつけ腰振りあう姉妹。その攻守はいつの間にもやら逆転し、今は姉の美琴が上に乗って、実の妹の胸を枕に悶えていた。

「くうっ、んんんうっ！ 智也くんっ、智也つくふううんん……っ！」
くちゅくちゅくちゅうっ！

いつの間にか、仰向けの状態でじわじわ這い寄ってきていた愛の大股に開いた股間が目

に留まる。右手には丈のかなり短い短いなぎなたを出現させていて、その柄で、スカートから覗く黒パンストの股布が破れてしまふのではと思うほどに激しく股間を扱き立てていた。

(うう………つ、焦らされた分だけたくさん、たつくさん……可愛がつてくれないと許さないんだからああつ)

フェロモンにやられているせいで、おそらく自分がどんなにはしたなく卑猥なポーズを取っているか気づいてないであろう制服少女。

まだ真琴の放った衝撃波のダメージが残る身体を引きずる愛の、切実な心の声が盛大に響き渡る。

「ふあつあつ、あうううううつ！」

脳に直接響く心の声に意識を惹かれること。それすらも許さぬとばかりに、理枝の嬌声がほとばしった。強烈な締めつけに襲われた肉の竿が歓喜に震えながら、先走りのツユを幼馴染みの胎内に吐きこぼしてゆく。

ぼぢゅつ！ ぢゅつにゅぶぶぶ！ にゅずぶつ！ ぼぢゅぶうううつ！

卑猥な水音が響くたび、肉竿全体が火傷しそうなほどの熱を孕み、激しい脈動で膣肉を揺さぶった。

(あつ、んんつ、んつ………！ すごいっ………どんだんあたしの中で、智也のおちんちん、硬く、大きく………あつ、熱くなつてく、うううつ………！)

(こいつ、こんなに、可愛かったんだ……)

今さらすぎることに改めて気づかされ。十数年待たせてしまった申し訳なさと、出会ってから今日までの分の愛しさとをまとめて詰め込んだつもりで、繰り返し繰り返し、ぬかるんだ膣内を突き上げる。

剥き出しの右胸も、競泳水着に隠れている左胸も、手当たり次第にもみほぐしては、幼馴染みの感極まった嬌声と表情に魅入り、また喜悅にまみれた肉の幹を膨張させた。

ぢゅぶっ！ ぬぶっぼぢゅうっ！ ぶぼっぢゅぼぶううっ！

「ひやああうううっ！ とっ、ともっ、やつ、あんっ、んっあああああゝっ！」
(キス、してっ……また、キスう……！)

上体を倒してしがみついていた理枝の華奢な身体を抱き締めて、そつと——そしてすぐにネットリと舌を絡ませて、長い長いキスを交わす。

「んふっ、んっんんう！」

(ズンズン、くるのっ……わ、わかるよおっ。キスしてるだけで、あ、アソコがキュンっとなつてえっ……よけいにおちんちんの形と鼓動、伝わってきてるうっ)

呼吸するのも忘れて唇を重ね続け、おたがい汗と蜜とを吐き散らかしながら腰を振る。

思いきり理枝の腰が振り落とされた瞬間も、逃げる彼女の腰を追いかけ目いっぱい突き上げた瞬間も。コリコリとした感触を肉の切っ先で味わい、堪能する。

その、弾力的で不可思議な感触の場所に肉竿の切っ先を押しつけた状態で、ふたり、まるで見計らったみたいに一緒に腰を回して、グリグリと——生殖器同士でも、熱烈なキスをした。

「ひあっあっああああああっアア~~~~!!」

反動で口を離し、ビクリと尻弾ませた幼馴染みが落ちてくるのを、真下から貫き抱き留めて——そのまま。

（だ、出してえええっ！ このままっ、ずっとぎゅってした、まま中でえっ……最後まで一緒にいいっ……いいのおおっ！）

強烈に引き攀れる理枝の中で、どっと噴き出た蜜液に溺れながら最上の悦楽に包まれる。

——どぐツツ!!

「ぐううううツツ!!」

迫り上がる白濁のマグマを、収縮する膣肉の求めに応じて、すでに蜜液でいっぱい膣内に、叩きつけるように噴きつけていく。

びゅっびゅびゅうううっ！ ぶびゅっ！ びゅぐっ！ びゅぐぐぶびゅうううっ！

「ひああうううっ！ あひっ！ いっ、ああああっ！ ま、またあっ、ああ……っ！」

（中でたぶたぶっ、ひっ！ ああ、智也のとあたしのおツユっ、掻き混ぜてくう……）

絶頂の大波に吞まれながら膣肉を引き絞る幼馴染みの求めに応じ、枯れ果てるかと思う



ほどの精を注ぎ込む。

どくつ……ごぼびゆつ……どくくつ……。

注ぐ端からこぼれ出る白濁を尻目に、何度も、何度も――。

「っひ、あ……あ、ああ……」

「も、もう一滴も出ねえ……」

五分ほども、抱き締めあつていただろうか。肉の鼓動はようやく止まったが、まだつながりあつたままのおたがいの股間は、肉欲の波の余韻に晒され過敏な状態が続いていた。

（姉さんっ、イクよっ……わ、わたしいっ！）

（きつ、きてえっ！ 一緒につ、ずつと……ずつとよっ！）

ひと際高まった藤井姉妹の嬌声。その切羽詰った様子から、彼女たちも絶頂の波に呑まれたのだと知る。

「とりあえず、あのふたりにとどめを刺す……必要はないか」

理枝に精気の塊を注がれたことが大きく影響しているのか、再度睦みあいだした藤井姉妹。彼女たちが今すぐ襲いかかってくることはさすがに考えにくい。

「……だね。藤井キャプテン、お姉さんに夢中になっちゃってるし」

目を改めてもまた襲ってくるようなら、その時迎え撃てばいい。

今は、愛しあうふたりを邪魔する気にはなれなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元的なヒロインは、美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



三次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



ヒサシ

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!

ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!